

Okakura Kakuzo

因念君天心全集
2

平凡社

岡倉天心全集 (全八卷)

第二卷 定価 五四〇〇円

一九八〇年六月二〇日 初版第一刷発行

著者 岡倉天心

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地
郵便番号一〇二
電話〇三(二六五)〇四五一
振替東京八一(二九六三九)

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

凡 例

一、本全集は、岡倉天心の著書、著述、講演、談話、未発表草稿、日記、ノート、書簡などを、現在可能な限り蒐集し、これに関連資料を付して、集大成したものである。

二、著書、雑誌、新聞に発表された論稿は、原則として初出を底本とし、自筆原稿あるいは異本との異同を校訂した。

三、英文の著書、著述、未発表草稿は、厳密な校訂をほどこした後、すべて新訳して収録した。

四、自筆の日記、旅行日誌、古社寺調査ノートなどは、できるだけ原型を損わぬよう翻刻した。

五、収録文は底本を忠実に翻刻することを旨としたが、読解の便宜をはかるため、次の方針で整理した。

1 原題のない草稿や新聞掲載の講演速記などには、編者による標題を掲げた。

2 漢字は新字体を使用し、俗字・略字は通行の字体に改めた。

3 あきらかな誤字・誤植は訂正し、誤使用あるいは正誤を判断しかねる用語・用法には、その初出に「ママ」を付した。また、現在通行の用法では誤字・誤記に類する用法も、文意が通ずるかぎりは敢えて改めなかつた。

4 仮名遣い、平仮名・片仮名の別、および濁音表記は底本通りとし、変体仮名(例 ま↓れ)、合字(例 毛↓トモ)などは通行の文字に改めた。

5 底本が自筆原稿の場合、文意の通じにくい字句、固有名詞の誤記などは「〱」内に註記した。(例 渴ヲ医

目
次

凡例

I

鳳凰殿……………	5
日本絵画史図説……………	35
現代日本美術についての覚書き……………	52
「美術院」または日本美術の新しい古派……………	58
絵画における近代の問題……………	62

II

ポストン美術館蔵の日本・中国絵画……………	89
ポストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話……………	92
中国日本部の新収品……………	98
新設された日本品陳列室の彫刻……………	103
『日本の鐔』序文……………	111
中国および日本の鏡……………	114
『漆工藝品特別展目録』序文……………	125

中国の玉	127
東洋藝術鑑識の性質と価値	139
東アジア美術における宗教	150
東アジアの絵画における自然	162
中国・日本美術新収品展	171
『漆工藝図録』序文	192
漆工史	194
III	
岡倉氏との会見	213
岡倉氏との会談録	215
ポストン美術館の充実について	219
日本美術品の写真収集について	222
岡倉氏との覚書き	223
美術館評議委員会に対する岡倉氏の演説	225
美術館評議委員会における岡倉氏の発言	232

日本美術部でなすべきことの覚書き	235
補充すべき美術品について	239
中国日本美術部の現状と将来	242
美術館案内制度に関する幾つかの提案	261
『漆工藝図録』に関する決定	265
不在中の中国日本部の仕事	267
IV	
孔子の時代と老子の時代	271
孔子の時代	271
老子の時代	277
止静と観照の実践法	314
V	
国宝帖	353
日本藝術概説	354
図版解説	381

解説	487
解題	499
(付録1) 中国日本部 法華曼荼羅	520
(付録2) ポストン美術館記録	521
倉田文作	487

岡倉天心全集 第二卷

I

鳳凰殿

日出ずる国日本は、古代から鳳凰（フェニックス）の生誕地と考えられてきた。

日本の隣人であり心暖かき友であるアメリカ合衆国は、このたび一大展覧会を開催することとなったが、その規模と構想の雄大さは、かつて世界が見たいかなるものをも凌ぎ、また鳳凰誕生の際にあらわれる瑞祥にも似たあらゆる成功の前兆を伴っている。日本はこの壮大にして栄光ある企画に同感し、翼を張り歌声を天に響かす鳳凰の喜びをもって、主催者の希望に呼応した。すなわち日本国民の過去一千年の遺産たる美術宝物をもたらして、展覧会に臨んだのである。

鳳凰殿、すなわちフェニックス・ホールは日本側委員会が建設し、展覧会終了後はシカゴ市に寄贈する予定である。鳳凰殿の名は、その形が鳳凰をあらわすところから来ている。比喩を用うれば、この伝説上の鳥は自分の国から太平洋の空を翔けて美術品をもたらしたのである。その美術品は世界の名作とはいいい得ないが、この世界博覧会にある程度、美を添え得るものと期待される。

古人の説によれば、鳳凰は鶏の頭、雀の嘴、動く蛇のような頸、重なり合う龍の鱗のような羽毛、麒麟（想像上の獣）の翼、魚尾に似た尾をもつ。羽毛はあらゆる色彩に輝き、超自然の美しさである。雌雄にほとんど差がなく、九千里の天に翔け登るといわれる。その声は簫（中国の楽器）の音に似て、雄が鳴けば雌が和し、この世

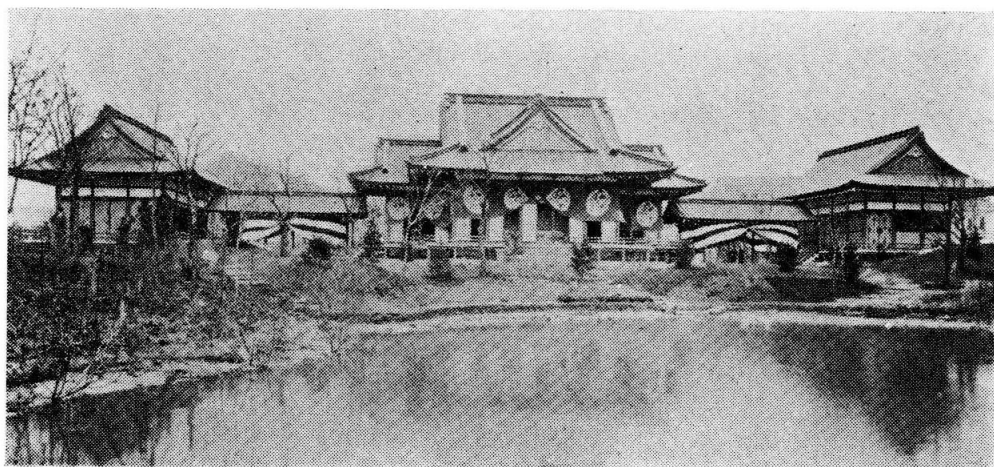
ならぬ清浄な音律で歌う。中国の楽制は鳳凰の歌を基としたものであり、簫は別名鳳凰簫とよばれた。鳳凰は桐の木に棲み、竹の実のみを食べる。生きた虫は食はず、生きた草は踏まぬといわれ、神聖、慈悲の象徴とされる。

中国では、鳳凰は日本に産する鳥と信じられた。中国の博物書には高雅な国（君子国）の鳥と記されており、君子国とは、一千年前に中国人が日本につけた名称である。そこにはまた、鳳凰は、慈愛に満ちた国政を敷き、人間やそれ以下の生き物の生命を奪うことなく、その人民が平和と繁栄を楽しむ聖徳の君主の治世にのみ姿をあらわすと記されている。

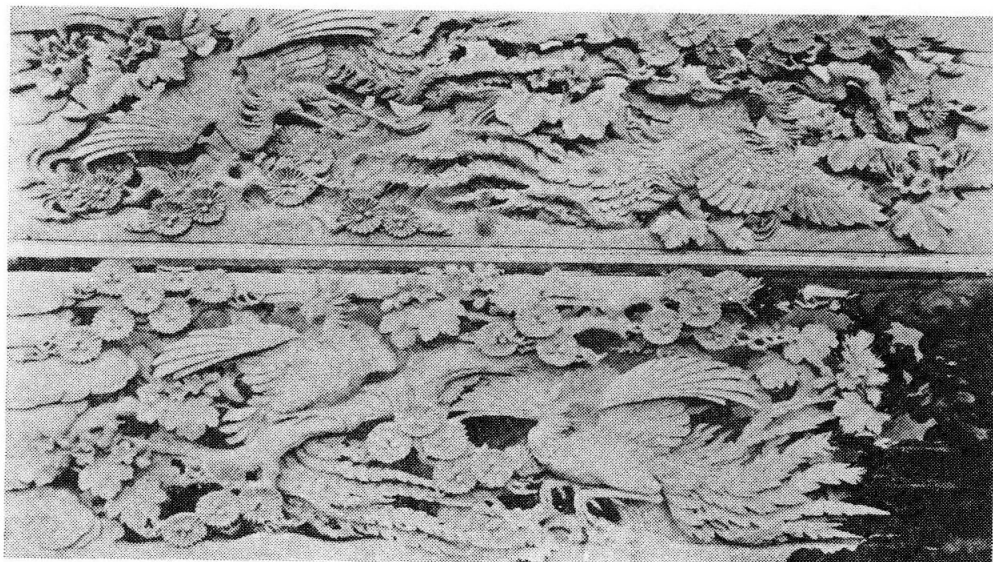
鳳凰が権威ある重要な物品の装飾意匠になっているのは、以上の属性によるのである。皇后の冠、神鏡、宮廷調度、社寺や神仏への供物の容器などは、いずれも鳳凰の姿で飾る。寺院そのものさえ鳳凰の形をとることがあった。そのような建物が日本の古都、京都に近い宇治の町にいまも立っている。西暦一〇五二年頃に藤原頼通が建立したもので、莫大な金額を費したという。『マレーの日本便覧』にはその現状を次のように述べている。「蓮池の向うに立つ建物は、日本で最も古い木造建築の一つ鳳凰堂、すなわちフェニックス・ホールで、その形状は極めて独創的である。今日、惜しむらくはかなり朽損しているが、もとはおそらく日本で最も美しい建築であつたろう。その名称は鳳凰フェニックスの形をあらわす意図であつたところからきており、重層の中堂は軀幹、左右の列柱は翼、後部の廊は尾にあたる。天井はこまかい格間に区画され、螺鈿で飾つてある。壁の上部をめぐつて、二十五菩薩（仏教の聖人）やいろいろな女性をあらわした一種の装飾帯がある。扉や、左右および須弥壇後方の壁には為成筆の古仏画——いまは殆ど剝落しているが——如来が九等の階位に随つて西方浄土に住するスクハ、ハーヴァ、テハ、（極楽）の九階層（日本語では九品浄土）がえがかれている。

須弥壇はもと金梨地に螺鈿を嵌め、壁面、柱も隅から隅まで入念に彩色がほどこされていたもので、当初の全

7 鳳凰殿



鳳凰殿正面



欄間 高村光雲作